

芹澤隆子（著）

施設ケアの新発想！オーストラリアのプロメソッド ダイバーショナルセラピー

石 山 満 夫

（千里津雲台訪問看護ステーション、作業療法士）



書評に入る前に、何より著者の芹澤隆子さんが素晴らしい人物であるということをお伝えしておきたいと思います。

2000年（平成12年）、私が前職場を辞め、独立しようかと悩んでいたとき、「楽しいほうを選びなさい。楽しいと成功するからやってみては」と、初対面にもかかわらず親身になって決断の後押しをしてくれたのが著者の芹澤さんでした。著者が私に施したダイバーショナルセラピー（DT）のおかげで今の私があります。

このようにDTは決して高齢者のためだけのものではありません。オーストラリアでは、ダイバーショナルセラピストは生涯を通じて「楽しみ」が人生に与える大きな力を活用する専門職です。

本書は、著者が20年で40数回も渡豪を重ね、「老後をいかに楽しむか、生きるか」を問い、現場を歩き、見聞きして肌で感じたことを、日本各地で実践された集大成です。ライター出身の著者の文章は大変わかりやすく、膝の上の孫に祖母が語りかける温もりさえ感じます。写真では、「これが日本か」と驚く光景が多くみられま

す。

本書は第1部のDT理論、第2部の実践、巻末の資料編で構成されています。第2部に6割と多くの紙面を割き、日豪のDTプログラムを紹介しています。

はじめにアセスメントありきのDT。著者が日本の状況に合わせて集約した「DTアセスメントパッケージ」では、生活歴や趣味、人間関係等の個別情報に光を当てています。なぜそれが好きなのか、どのように好きなのか、「アセスメントシート」の行間から浮かぶその人の人生そのものを感じ取り、尊敬の念と親しみを抱けてこそアセスメントの重要な意味」と著者。ある入居者が新聞を1人で読んでいたら、ダイバーショナルセラピストは何人かの入居者に声をかけ、「新聞を読む会」の立ち上げ支援をし、さらに地域の住民にも呼びかけます。ダイバーショナルセラピストは地域の窓口となり、入居者が社会とのつながりを持続ける「ソーシャルプログラム」を開発します。また、目の不自由なマギーの事例では、DTにより自信を取り戻したマギーは愛猫を抱いてホームを杖も使わず自

由に歩き回るほど元気になりました。もちろん自由に歩くことに伴うリスクがないわけではなく、あるとき腕にはギプスをしていたそうです。でも入居者には「リスクを受容する権利」もまたあるのです。リスクを伴うことを理由に行動制限をしないように、ダイバーショナルセラピストは入居者・家族の権利擁護を担います。

30年前、私が実習に行った大学病院では「DT」と書かれた作業療法の処方箋がありました。先輩の私たちが、単に気晴らしの提供ではなく、自ら生きる意味を見いだす権利の視点が不十分なせいで、この分野の専門性の追求ができなかったと思います。日本でダイバーショナルセラピストは看護や介護職が兼務し、「老いることを楽しむために手助けする専門職」と日々努力されています。私たちOTが忘れかけた全人的ケアに立ち戻り、「ケアの思想」を学ぶ転換本だと思います。

〔 B5判 176頁 2,600円＋税 〕
三輪書店 刊
☎ 03-6801-8357